

宇和島市 宇和島城

3度の危機を乗り越えた城
―宇和島城とまちが歩んだ400年の歴史―

宇和島市長（愛媛県）
岡原文彰（おかはらふみあき）



自然豊かなまち「宇和島」

宇和島市は四国の西南部に位置し、東は標高1151mの鬼ヶ城山を中心とした鬼ヶ城山系に、西は入り江と半島が複雑に入り組んだリアス海岸に挟まれた自然豊かなまちです。江戸時代は「伊達10万石の城下町」として、近代以降は西南四国地域の中核都市として発展してきました。

宇和島城の成り立ち

宇和島城は市街地の中心に位置する標高73mの丘陵にある城跡です。戦国時代には伊予西園寺氏の支城として中世山城がありましたが、文禄4（1595）年に築城の名手とうたわれる藤堂高虎が宇和郡を与えられ、翌慶長元（1596）年から城の改修を開始して、石垣造りの近世城郭へと姿を変えました。山の形状を利用した不等辺五角形の縄張で、西側2辺は海に面し、残る3辺は海水を引き入れ堀とした海城でした。現在は埋め立てによって堀を見ることはできませんが、町割に五角形の名残が見て取れます。

江戸時代に入ると、伊達政宗の長男秀宗が宇和郡10万石を与えられて宇和島城に入り、その後明治維新まで宇和島伊達家9代の居城として在り続けることとなります。2代藩主宗利の時代には宇和島城の大改修を行います。この時に建てられた天守が現存12天守の一つとして今も残り、重要文化財に指定されています。幕末以降に海や堀が埋め立てられたことから、今では宇和島城が市街地の中心に位置する形となりました。


宇和島城と宇和海

宇和島城を襲った3度の危機

藤堂高虎が築き、伊達家へと受け継がれた宇和島城ですが、その存亡の危機が3度訪れます。1度目の危機は幕末、安政元（1854）年に西日本から東日本の広範な地域を襲った安政の大地震です。同年11月5日に発生した地震は「安政南海地震」とも呼ばれ、宇和島城も天守を含む多くの建物が被害を受けました。天守は万延元（1860）年に修理を行い、その時の修理記録は今も天守内部で見ることができます。

2度目の危機は明治6（1873）年の廃城



万延元年修理時に作成した天守の雛形

令です。この廃城令により多くの城郭が廃城となり、櫓などの建物が廃棄されましたが、宇和島城は存城処分として危機を逃れます。ただし、この存城処分は城を文化財として保存するというものではなく、軍用地として使用するためのものでした。その後、明治22（1889）年に伊達家は宇和島城の払下げを政府に願い出て、翌年、宇和島城は再び伊達家の所有となります。

3度目の危機は第二次世界大戦です。戦争末期に宇和島は幾度も空襲を受け、城山と天守は難を逃れましたが、昭和20（1945）年7月12日には当時国宝であった追手門にも火の手が回り、焼失してしまいました。

宇和島城を守り・つなぐために

幾度もの危機を乗り越えその姿を保ち続けてきた宇和島城ですが、近い将来発生が懸念される南海トラフ地震では、震度6以上の揺れが予測されており、災害への備えが急務となっています。現在、天守の耐震診断を進めるとともに石垣の補強工事に着手し、人的被害や損失リスクを最小限に抑えるため対策を進めています。

さらに、歴史的価値を地域の発展に生かす取り組みとして、市のロゴマークに天守のモチーフを採用したほか、昨年度には「宇和島フォトフェスティバル2025 UWA JIMA SIGHTS」を開催し、天守や石垣を展示空間として活用することで、新たな宇和島城の魅力を発信しました。

先人が守り・つないできた宇和島城を確実に次世代へと継承し、そして、地域活性化や文化創造に向けた活力となるよう今後も取り組んでまいります。



宇和島城天守

歴史探訪コラム 城と都市のでんせつ

江口知秀
建設産業図書館 学芸員

会見の松

慶応3年に西郷隆盛は宇和島を訪れていた。応対した前藩主・伊達宗城は、土佐の山内容堂、福井の松平春嶽、薩摩の島津斉彬と並び「幕末の四賢侯」として誉れ高く、また勤王の志が厚かった。

詩人の高橋新吉による「宇和島御殿町の黒松」には、西郷の急な来訪と、上京を促す鋭い舌鋒（ぜっぽう）に対し、宗城は「京になじみの女でもいるのか」とからかったと書かれている。

かくして5月には宗城、容堂、春嶽に加え島津久光の四侯が京都に集まり、長州藩の処分や兵庫開港など重要案件を議した。結果、話し合いはまとまらず、薩摩藩は倒幕へとかじを変えた。その会議の起点となった宇和島での西郷・宗城会談が開かれたのが「会見の松」の下だと伝えられる。

昭和51年時点で「会見の松」は、伊達家の屋敷跡地に建てられた宇和島市立伊達博物館前にあったという。この黒松の下で、宗城は陪臣の身である西郷吉之助を歓待し、胸襟を開いて語り合った。『史伝の人とその周辺　伊予の巻』によれば、この時の会談の模様は『中岡慎太郎日記』に詳しいそうだ。

伊達宗城は他の幕末の英雄に比べ知名度は低いが、蘭学者の高野長英を宇和島に招いたり、戊辰戦争勝利の立役者となる村田蔵六、後の大村益次郎を高禄で召し抱えたりと先見の明があった君主だった。

さて、最後に「会見の松」の現在についてだが、伊達博物館によると同館前の道路中央分離帯にある松が二代目であり、初代の松は虫害によって昭和53年に伐採され、一部が同館に保存・展示されている。